

第43回

# 少年の主張大会

## 作文集



高浜市

高浜市教育委員会

「少年の主張大会」は今年で第43回を迎えます。本大会を通して、これからの高浜を担う青少年の主張に触れることができ、大変うれしく思います。

少年の主張大会が本日ここにある意味は、次代を担う青少年が自らの意見を社会に向けて発信する場を通じ、自己の成長を促すとともに、大人社会のあり方を見つめ直すきっかけを生み出すことにあります。

この発表を通じて、青少年が「大家族たかはま」の一員として社会へ大きく羽ばたくとともに、大人も共に成長し、青少年が夢を抱き、誇りをもって育っていける社会を築いて参りたいと考えております。

最後になりましたが、今日の大会を支えるすべての方々のご協力に改めて感謝いたします。そして、発表者の皆さんが自分の声を社会へ届けるこの機会を、今後の糧としていけるよう見守ってまいります。皆さんの声が、未来の高浜をより豊かにする力となることを信じています。

高浜市長 杉浦 康憲

第43回少年の主張大会を迎え、発表者の皆さん、関係者の皆様に心から感謝します。本大会は、日ごろの思いを自分の言葉で素直に表現し、地域社会とともに未来を考える貴重な場です。

大会を通じて培われる力は、自己表現の技術だけでなく、相手の話を丁寧に聴く姿勢、異なる意見を尊重し対話を深める能力、そして困難に直面したときに粘り強く考え抜く力です。これらは地域の絆を強くし、未来を創る原動力となります。また、発表準備で身につけた創造性と自立心を、これからの学びや日常生活のさまざまな場面で生かしてください。

この大会が、子どもたちの声によって地域の未来を照らす灯となり、互いを尊重し、支え合う社会づくりの一步となることを期待しています。発表者の皆さんの成長と活躍を心より祈念します。皆さんのこれからの歩みが、より多くの希望と可能性に満ちたものとなることを願っています。

高浜市教育委員会  
教育長 村越 茂樹



## 小学生の部

☆ 真 <sup>まこと</sup> を求めて	高浜小学校6年	みすかみ 水上 　 るみ 琉海	……	2
☆ 二つの思いを乗せてろうそくへ	吉浜小学校6年	なかかわ ちさき 中川 知咲	……	3
☆ 空っぼの食缶	高取小学校6年	いわつき かつま 岩月 克馬	……	5
☆ 後悔のないように	港小学校6年	たけのうち ゆうと 竹之内 結仁	……	6
☆ 少年の主張で見つけたこと	翼小学校6年	おかべ なつめ 岡部 夏芽	……	8

## 中学生の部

☆ 今日も空を見上げて	高浜中学校3年	えさき こと 江崎 胡豆	……	9
☆ 人と人を繋ぐ言葉	南中学校3年	いしかわ ここ 石川 心湖	……	11

## 高校生の部

☆ 私だけの色	高浜高等学校3年	もり ああや 森 愛彩	……	13
---------	----------	-------------	----	----

〔敬称略〕





## 真を求めて

高浜小学校6年 水上 琉海

今、私たちの周りには、色々な情報があふれかえっています。世の中のでき事は、テレビやスマートフォン、ラジオなどいろいろなメディアで簡単に情報を集められます。私達はそれらの情報を一方的に受け取り、それらが真実かどうかを確かめるために自ら調べることはほとんどありません。しかし、私たちがよく使うSNSでは嘘の情報も含まれているということが大抵の人が知っていると思います。

では、テレビやラジオの情報はどうでしょうか。私はこれまで、テレビなどで放送されるニュースは疑う余地のない本当のことだと思っていました。しかし、ある時、母がふともらした言葉に、その考えは間違っていたかもしれないと思うようになりました。母はニュースを見ながらこう言ったのです。

「なんかすごいことになっているけど、本当のことなのかな。」

私は、母の言葉にびっくりして、

「ニュースって本当の事を話さないとだめなんじゃないの。」

と聞きました。すると母は、

「ほとんどが本当の事だと思うけど、ちょっと話を盛っていたり、話の一部を隠したりしているかもしれないからね。」

と言ったのです。その言葉を聞いて、低学年の頃に読んだ本を思い出しました。それは戦争中の話です。当時、日本は負けていました。でも、まるで勝ち続けているかのようにラジオでニュースを流し続けていたのです。このようなことから、ニュースの作り手は、情報をどのように流すか、決められる立場にあることに気づきました。流す情報の量や、どこを切り取るか、決めることができるのです。それは、人の心を都合よくコントロールしようとする、フェイクニュースだと思いました。嘘の情報を流し続けるラジオを聞いていた人たちは、そのことに気づいていなかったのだらうと思います。このようなことは、決して過去のでき事ではありません。今でも気づかないうちに嘘を真実だと思い、逆に真実を疑うことは十分すぎるほどあるのです。

こんなことがありました。他愛もない友達のうわさ話で盛り上がっていたときの事です。

「Aさんってね。習い事をしてるんだって。」と私が何気なく言いました。すると一緒に話していた友達が、

「え、違う。Aさんは習い事してないよ。」





と言ったのです。私がAさんのことは、Bさんから聞いたことだと言うと、

「Bさんからの情報は信用できない。」

と言いました。私はBさんと仲がよかったので、Bさんが嘘つきだと思われるようで、悲しくなりました。それにAさんが習い事をしているかどうかは、周りでいろいろ話しているよりもAさんに直接聞けばいい、とも思いました。勝手な想像で決めつける前に自分で確かめることが大切なのです。特に、自分の周りの人たちに関する場合は、必要なことだと思いました。このことから私は、情報は慎重に大切に丁寧に取りあつかうものなのだと思うようになりました。戦争中のラジオのフェイクニュースについて、当時の人たちの中には、おかしい、と思っていた人たちもいたのではないのでしょうか。でも、多くの人たちが、その情報をあたり前のように受け取り、生活の一部としていく中で、どんどんひどくなる戦争に気づけなかったのだと思います。

ですから、私は、自分に伝わってきた情報をすぐに心の内には入れないようにしようと思います。目や耳に入る情報を全て受け入れてしまえば、友達に対して偏見をもってしまったり、人を傷つけたりしてしまう心配があるからです。また、自分の手で嘘の情報を伝えてしまい、人に嫌な思いをさせる場面もあるかもしれません。

私は、後悔しないように真実を自分の目で見て自分の耳で聞いて確かめ求めていきたい。そのために真実かどうかを見極める力をつけていきたい。私はこの先もその決意をもち続けていきます。真を求めて。

## 二つの思いを乗せてろうそくへ

吉浜小学校6年 中川 知咲

「お誕生日おめでとう」三月十一日の朝、家族の声で私の新しい年が始まります。お母さんとお父さん、弟は、みんな笑顔。お祝いの料理は私の好きな豪華なお肉です。リビングには、ガーランドや自分の年齢の数のバルーンが飾ってあります。こんなに素敵な誕生日を迎えられて、私は幸せな気持ちでいっぱいです。

でも、そんな幸せな気分のままテレビをつけると、いつも悲しいニュースが流れています。自分の誕生日なのに、ニュースを見るたびに悲しくなり、胸がしめつけられるような気持ちになります。





今年の三月十一日に、私はあるニュースを見て言葉にできない複雑な気持ちになりました。給食の赤飯が出たことに対して、「不適切だ」という声が上がリ、全て捨てられてしまったという内容です。これを知った時、私はとてももったいないな、と感じると同時に怖くなりました。もしかしたら声を上げた人たちは赤飯を捨てて欲しかったわけではなく、震災で亡くなった人たちへのことを思って行動したのかもしれない。でも、もし私の誕生日にケーキを買ったりお祝いしたりすることが「ダメなことだ」と言われたら、どうすればいいのでしょうか。三月十一日は悲しい気持ちで一日を過ごさないといけないのでしょうか。この日を選んで生まれたわけではないけれど、私を愛してくれている家族にお祝いをしてもらうことが、誰かを傷つけることになってしまうのでしょうか。自分の誕生日の嬉しさと、あの日を大切にしている人を悲しませてしまうのではないかと不安が入り混じり、なんとも言えない複雑な気持ちになります。ですが私は、誕生日を喜ぶことと震災を忘れないことは、同時にできるはずだと信じています。

私は東日本大震災を直接は知りません。生まれる前に起きた出来事だからです。東日本大震災は東北地方を中心に震度七の地震と巨大な津波が街を飲み込み、多くの命が失われたこと、そして、福島第一原子力発電所の事故が起きたことを、私は両親から教えてもらいました。多くの人が亡くなり、十五年経った今でもまだ見つからない人もいます。その話を聞いた後で参加する学校の避難訓練は、私にとって単なる行事ではなくなりました。もし今この教室で同じことが起きたらどう行動すべきなのか。自分一人が助けられればという気持ちではなく、自分やみんなの未来の準備だと思って、真剣に取り組むようになりました。

三月十一日は、日本にとって忘れてはいけない日です。その日が誕生日である私にとって、震災は他人事ではありません。この日に生まれたからこそ一生このことを忘れない、命の大切さを人一倍考え、震災に備えていくことに意味があると感じています。

今年の誕生日、私は二つの思いを込めてろうそくを消しました。一つは私を生んでくれた大切な家族への感謝。もう一つは震災で亡くなった方々や被災してつらい思いをした方々への祈りです。この二つの思いは、どちらかが優先されるのではなく、嬉しいことは素直に喜びながら、悲しみに寄り添っていく。そんなふうに両方を大切にしても良いのではないのでしょうか。

いつ地震が起きるかわからないからこそ一日一日を大切に過ごし、簡単に命を落とさないように備えていきたいです。具体的には、家族と避難場所を確認することや、家の中の家具が固定してあるか、逃げ道を確認することはできているか、食料品の備蓄などの確認をすることを、毎年の誕生日の習慣にしようと思います。また、直接震災を知らない私だからこそ、当時の地震を自分から積極的に学び





続け、忘れないでいることも大切だと感じています。そして、これからも私はこの特別な日に感謝と祈りを重ねて歩いていこうと思います。

## 空っぽの食缶

高取小学校6年 岩月 克馬

ガシャンガシャン。給食の片づけの時間。クラスメイトが楽しそうに話している声とは裏腹に、ぼくは残されたものから目がはなせませんでした。それは、回収された食缶の中に残された料理です。例えば、その日のこん立に苦手な野菜が入っていて、残されてしまった料理です。

みなさんは、自分の学校でどれだけの給食が捨てられているか知っていますか。農林水産省の調査によれば、生徒一人あたり、年間約十七キログラムの給食が捨てられています。この数字を知ったぼくは、胸がしめつけられそうな思いをしました。ぼくたちが当たり前のように口にしている「いただきます」という言葉は、一体どこへ行ってしまったのでしょうか。

ぼくは、この問題についてもっと知りたくなりました。そして、調べてみて知ったことは、ぼくの想像をこえるものでした。調理員さんたちは、ぼくたちが登校する時間帯に、そしてある時は、ぼくたちが登校する前に仕入れをし、冷たい水で何百人分もの野菜を洗い、大きななべでかくとうしています。栄養教諭の先生は、一グラム単位でぼくたちの健康を考え、こん立を作ってくれます。それだけでなく、その野菜を育ててくれた農家の方、魚をとった漁師の方、鳥、牛、豚などの家畜を育ててくれた方、そして何よりぼくたちの血や肉となるためにささげられた「命」があります。きらいだからやおなかがいっぱいだからなどの理由でゴミ箱へ捨てられる食べ物たち。それは、関わった全ての人たちの「想い」と尊い「命」を無かったかのようにしているのと同じだとぼくは思っています。

「いただきます」や「ごちそうさまでした」という言葉は、その命をいただくことへの感謝の言葉のはずです。それなのに、ぼくたちは、簡単に残してよいのでしょうか。そして、大切な命をゴミとしてよいのでしょうか。そこで、ぼくは、給食をなるべく残さないようにしました。まずは、苦手なものでも一口は食べることを意識しました。最初は勇気がいります。しかし、食べてみると意外にお





いしいこともありました。また、配膳の時に食べられる量を取り、自分の量を考えて調節するようになりました。クラスの食缶が空の時は、とても足取りが軽く感じました。

調理員さんに、直接ありがとうございますとは言えなくても、心の中ではいつも「おいしい給食を作ってくれて、ありがとうございます」と思っています。

この地球では、ご飯を食べたくても食べられない人はたくさんいます。そんな中で、ぼくたちは栄養たっぷりの給食を食べることができています。これを当たり前と感じていることは、とても幸せなことだと気づきました。

食品ロスを減らすことは簡単だとぼくは思っています。一人ひとりが目の前の一皿を心をこめて、自分の食べられる量に調節することから始めればよいと思います。「いただきます」と「ごちそうさまでした」この二つの言葉は、食べ始めや終わりのただの合図ではなく、心から感謝の言葉として大事にしていきたいと思いました。そして、いろいろな食べ物を美味しくいただきたいと思います。

みなさんも、今日給食を食べ終わった後に食缶が空なのを想像してみてください。その空っぽの食缶は、さまざまなものに対する感謝の形そのものだと思います。そして、そこには、きっとたくさん  
の想いがつまっているはずですよ。

## 後悔のないように

港小学校6年 竹之内 結仁

みなさんは、自分のおじいさん、おばあさんのことを大切にしていますか。声をかけられても、適当な返事で済ませ、自分の好きなことだけで楽しんでいませんか。ぼくは、祖母の考えていることを想像できなくて、後悔してしまった経験があります。

ぼくには、毎週のように一緒に遊んでくれる祖母がいました。祖母の家に行くと、よく、完ぺきに味付けしたフライドポテトを作ってくれました。祖母はとても親切でしたが、ぼくは、ゲームなどに夢中で、無視をする時もありました。

七年前、急に祖母が、お腹がいたい、とよく言うようになったそうです。突然のことで、おかしいと思った祖父が、病院に連れていくと、「胃がん」と診断されたそうです。そして、お医者さんに、延命手術をするか、そのまま何もせずに最期を迎えるか、と聞かれた





そうです。結局、何もしないことを選んだそうです。

それからは、入院せずに、がんばって生活していました。時々、ぼくたちがお見まいに行く時もありました。その時の祖母は、比較的元気な時が多く、僕は安心していました。だからあまり祖母のことを気にしていませんでした。

それから三年後、祖母の体調が悪化したので、入退院を繰り返す生活が始まりました。入院するまでは、元気に「ゆうとくん。」

と、話しかけてくれていたのに、退院してきた祖母の顔からは笑顔が消えて、あまり元気がなさそうでした。体も、骨が見えるほどやせており、その時は、少しまずいなと感じていました。しかし、その時のぼくは、買ってもらったばかりのゲームに浮かれていて、そこまで祖母のつらさを考えることができませんでした。

その年の九月、祖母の体調がさらに悪化していきました。祖母が「最期はおじいちゃんと一緒にいたい」

と言い、入院生活をやめ、祖父と家で一緒に過ごすことにしました。それからは、病気との激しい戦いだったそうです。体全身が痛くなり、動けなくなっていました。そのせいで、まともに食事もできませんでした。時々、祖母が、「背中をさすって。」

と、祖父やお見まいに来ていた家族に、苦しそうに言っていました。ぼくも心配はしていましたが、どうすればいいか分からなくて何もできませんでした。

それから約七か月後、祖母が亡くなりました。ぼくにとっては、初めて身内が亡くなったという知らせでした。おそう式で、ぼくは、ひつぎの中で眠っている祖母に声をかけましたが、もう返事はありません。初めて身内を亡くしたそのしゅん間は、味わったことのない不思議な感覚でした。

祖母が亡くなったことを知った時、悲しみと後かいが、ぼくの心の中にありました。もっと背中をさすってあげれば良かった。もっとおばあちゃんと話せば良かった、もっとおばあちゃんと遊べば良かった、という思いが次々にあふれてきました。

この経験から、強く感じたことがあります。自分のやりたいことや、好きなことばかりではなく、大事な人のためにできることを、できる時にすることの大切さです。ぼくは、祖母がどうして欲しいかを想像せず、行動することができませんでした。そして、亡くなってから後悔をしました。

大事な人がいなくなってからだと、その人にとって何ができるかを想像しても、行動することはできません。だからこそ、みなさんも、大切な人が生きているうちに、たくさん関わってほしいと思います。言葉をかける、一緒に過ごす、そんな小さいことでも構いません。自分にとっても、相手にとっても、決してくい残らない生





活を送るために、今できる一步をふみ出して欲しいと思っています。

## 少年の主張で見つけたこと

翼小学校6年 岡部 夏芽

私には少年の主張ができません。

「少年の主張の原稿を書きましょう」という課題が出されました。私は、何を書いたらよいか分からず、どんなことを書くとよいのか調べてみたところ、将来の夢や、自分のことについて書くと、書きやすいとありました。

そこで、将来の夢について考えてみました。しかし、私には今、なりたいものがありません。「じゃあ、他に書くことはあるかな。」と思い、自分のことについて考えてみました。

私がいつも考えているのは、習字が上手になりたいな、お腹が空いたな、次はどの小説を読もうかな、眠たいな、面白いことはないかな、ということでした。なかでも、私は、本を読むのが好きです。これは主張に使えるかもしれませんが、でも、よく考えてみると、本を読むのが好きだからと言っても、文章を書くのが得意なわけではないし、音読の宿題も、進んでやりたいとは思いません。私は気がついてしまいました。私には特に主張できることがなかったのです。この課題は、私にとって、とても難しいものでした。

それでも、なんとかするために、もう一度考えてみました。夢についての主張がないと言った私ですが、夢があった時もありました。保育園の時にはパン屋、小学校低学年では、大学の入試に合格して、大学生になること、最近までは、通訳になるという夢がありました。

過去形で話したのは、成長するにつれて、興味があることが増えていって、夢が一つにしぼれなくなったからです。それに、夢をかなえるための課題がたくさんあって、それに立ち向かっていく自信がもてなかったからです。私は、多くの夢をあきらめてしまいました。

パン屋さんになるためには、私の苦手な早起きをしないといけない。大学に入るためには、たくさん勉強をしないといけない。つまり、苦手な「算数の友」も前向きにやらないといけない。そして、通訳になるためには、その国の言葉だけでなく、文化も知らないといけないということにも気付きました。どれも難しそうです。

ただ「なりたい」と言っていた小さな頃と比べて、夢をかなえる





ためには何が必要かを考えられるようになったのは、自分でも、なかなかすごい成長だと思います。ですが、そのために、「これになりたい」と、ずっと思い続けられない自分は「少し寂しいな」とも思いました。でも、なりたいと思い続けられないということは「大変なことを乗り越えてまで、本当になりたいものではないんだろうな。私の本当の夢はどこにあるのかな。」とも思います。

なかなか原稿が書けず、悩んでいる私を見て、「なりたいものが見つからないなら、自分が好きなものを夢にするという選択肢もあるよ」とお母さんは教えてくれました。好きなことからなりたいものを考えたこともあります。

ですが、今は、無理に夢を決めてしまうのではなく、いろんなことを経験し、夢を探してみたいなと思っています。それは、まだ私が知らない、たくさんのことの中から、やりたいことを見つけ、そのためにやるべきことを考えるのは、成長するために大切な一歩だと考えるようになったからです。それを繰り返していくうちに、私の本当の夢が見つかったらいいなと思います。

だから今は、夢をもつことが大事だと考えるのではなく、夢を実現するために必要な、考える力をつけることを大事にしたいです。

今の私は、主張するほど夢中になるものをもっていませんが、これからも夢を探し続けて、成長していきたいです。将来、本当の夢を見つけた私が、なんにだってなれるように。

## 今日も空を見上げて

高浜中学校3年 江崎 胡豆

あなたは今日、空を見上げただろうか。

最近、電車の中でも、信号待ちでも、多くの人がスマートフォンの画面に目を落としている。街を歩いていると、多くの人が下を向き、スマホの画面を見つめている。信号待ちの短い時間でさえ、すぐにスマホを取り出す人も多い。また、誰かと話している最中なのに、相手の表情ではなく通知を気にしている場面を見ることもある。便利さに囲まれた現代で、私たちはいつの間にか、目の前に広がる日常を見る時間を失ってしまっているのではないだろうか。





そんな中で、私がこの作文を書きたいと思った出来事がある。ある日の夜、私は家族と一緒に散歩をした。普段なら家に帰ってすぐスマホを開き、動画を見たり、SNSを眺めたりして過ごしていたと思う。しかしその日は、家族と話したいと思い、外に出た。

夜の道は静かで、昼間とはまるで違う景色が広がっていた。見上げると、空には深い紺色が広がり、星が静かに光っていた。私はその時、「最近、こんなふうに空をじっくり見たことがあっただろうか」と思った。昼間は学校やスマホに意識が向き、空の色の変化に気づく余裕もなく過ごしていた気がする。

散歩の途中で川沿いを歩いた時には、水の流れる音が静かに響いていた。街灯の光が水面に反射して揺れている様子が、とてもきれいだった。小さい頃にも同じような景色を見ていたはずなのに、その時よりもずっと美しく感じられた。

やっと私は、自分が普段どれだけスマホの画面ばかりを見て生活していたのかに気づいた。画面の中には次々と新しい情報が流れ、気づけば何時間も経っていることがある。しかし、その時間が終わった後、心には何も残っていないような、どこか虚しい気持ちになることがあった。スマホの画面を眺めることによって、日常の小さな美しさに気づく機会を失っていたのだ。

一方で、その夜の散歩では、空気の冷たさや川の音、家族との何気ない会話が心に残った。特別な出来事ではない。それでも私は、「こういう時間こそ、本当に大切なのではないか」と感じた。スマホの中には便利さや楽しさがあるが、それだけでは感じることのできない温かさや美しさが、現実の世界にはたくさんあるのだと思う。

私は、家族と並んで歩きながら、同じ景色を見て、「きれいだね」と言い合える時間に温かさを感じた。もしそれぞれがスマホを見ていたら、同じ場所にいても、この気持ちを共有することはできなかったかもしれない。人と本当に向き合うためには、画面ではなく、相手自身を見ることが大切なのだ。

もちろん、スマホは今の社会に欠かせない存在だ。調べ物をしたり、離れた人と連絡を取ったりできる便利な道具であることは間違いない。

しかし、大切なのは「使われる」のではなく、「自分で使い方を選ぶ」ことだと思う。必要以上に画面を見続けるのではなく、時にはスマホを置き、周りの景色や大切な友人、家族に目を向ける時間をつくる必要があるのではないだろうか。スマホに時間を奪われるのではなく、自分で使い方を選ぶことができれば、私たちはきっと、今まで





見逃していた景色や、人の温かさに気づけるようになる。何気なく過ぎていく毎日の中にも、本当は心を動かす瞬間がたくさん隠れているのだ。

あなたは最近、空の色が変わっていく瞬間を見ただろうか。隣にいる人の笑顔を、しっかりと見つめただろうか。画面の中に答えを求め続けるだけでは気づけない「美しさ」が、この世界には確かに存在している。

だからこそ私は、自分の目で世界を見つめたい。そして、目の前にある小さな幸せを見逃さずに生きていきたい。

## 人と人を繋ぐ言葉

南中学校3年 石川 心湖

「英語に関わる仕事に就きたい。」

それが私の幼い頃からの夢でした。世界中の人と繋がり、広い世界で活躍する自分を想像しては、胸を躍らせてきました。その夢の第一歩として、私は中学二年生のうちに英検準二級プラスを取得しました。合格通知を手にした時の喜びは今でも忘れられません。机に向かって単語を暗記し、文法を叩き込んだ努力が、一つの形として認められたのだと実感できたからです。そのとき私の中には、「自分は英語ができる」、そんなうわついた自信が芽生えていました。しかし、その自信は、ある休日の外出先で呆気なく崩れることとなりました。

「Where can I find this?」

人混みの中を歩いていると、一人の外国人に呼び止められました。彼女は私の持っていたキーホルダーを指さし、それがどこで売っているのかを尋ねてきたのです。耳に入ってくる英語は、聞き覚えのある単語ばかりでした。内容は理解できる。私は、店の場所を伝えようと思いました。しかし、いざ話そうとすると、口が凍りついたように動きません。頭の中では必死に文法を組み立てようとしていても、前置詞はどうすべきか、語順はこれで正しいのかという不安が次々とわいてきて、結局、私は曖昧な笑みを浮かべて店の方向を指さすことしかできませんでした。そのとき、「自分は英語ができる」という自信が、音を立てて崩れていくのを感じました。





さらに追い打ちをかけるような出来事が、その後すぐに起こりました。ある施設の入口で、スマートフォンの操作が分からず困っている外国人グループに遭遇しました。彼らが困惑しているということは、操作画面を見つめている様子から、一目で分かりました。今の自分なら、彼らの力になれるはずだ。そう思いました。しかし、先ほどのうまく答えられなかった失敗が頭をよぎります。もし間違った情報を教えてしまったら。もし私の英語が通じなかったら。結局、私は助けを求める彼らの視線から逃げるように、その場を通り過ぎることしかできませんでした。

家に帰り、一人になると、猛烈な後悔に襲われました。机の上で合格点を取ることができても、目の前で困っている人に一言も声をかけられない。そんな私の英語に、一体何の意味があるのだろうか。準二級プラスという肩書きに、自分は英語ができるんだと満足し、一番大切なことを見失っていたと気づかされました。言葉はテストのためにあるものではありません。人と人が心を通わせるための、血の通った「道具」であるはずなのです。私は完璧な文法で話すことばかりに気を取られ目の前の「人」を見ていませんでした。たとえ文法が少しくらい間違っているだけでも、単語が並んでいるだけでも、伝えようとする意思さえあれば、手助けはできたはずなのです。私は、英語の道を志した目的を見失っていました。難しい資格を目指すことは決して無駄ではありません。しかし、それはあくまで人と繋がるための過程であり、目的ではないのです。本当の目的は、言葉の壁を越えて誰かの力になることだったはずです。私は今、もう一度英語と向き合おうとしています。合格点を目指す勉強をするだけではありません。自分の意見を英語で伝え、色々な場面を想像して英語でコミュニケーションをとる、失敗を恐れずに自分の想いを伝える練習もしています。

次に街中で困っている人に出会ったとき、私はもう目を逸らしません。英検の合格証書をポケットで握りしめているのではなく、ぎこちなくても温かい言葉をかけたいです。英語に関わる仕事に就くという夢は、決して簡単にはかなうものではないと思います。今回の出来事のようにこれからもいろんな壁にぶつかることでしょう。そんな時でも逃げずに、常に自分と向き合って、自分の英語で人を支える、私が幼い頃に憧れた素敵な大人になりたいです。





## 私だけの色

愛知県立高浜高等学校3年 森 愛彩

「必死に生きてこそ、その生涯は光を放つ。」  
これは、織田信長が残したとされる言葉です。人生をただ何となく過ごすのではなく、夢や目標に向かって全力で取り組み、挑戦してこそ、その人の歩んできた軌跡は輝きを増す、という意味が込められています。

では、今の皆さんは、夢や目標に向かって全力で取り組んでいますか？明日もし死んでしまっても後悔はしないように、毎日を過ごしていますか？子どもの頃と同じ夢を追い続けている人はきっと多くはないでしょう。

それは、大人になるにつれて、周りと合わせるようになってしまうからです。たとえ夢を追い続けても、周りに「まだそんな夢見てるの？」「現実見なよ」と言われたり、思われたりしてしまいます。かつて私も一度、夢を追い続けることをやめてしまったことがありました。

私の子どもの頃の夢は、アイドルになることでした。小学校四年生まで追いつけたその夢は、友達に言われた「現実見なよ」という一言で、諦めることになってしまいました。

ですが、周りに合わせて一色になる今の世の中では、いけないと思います。十人十色という言葉があるように、一人一人の色を大切にする必要があります。人には得意不得意があり、見た目も性格も誰一人として同じ人などいません。似ているようで、一人一人が、それぞれの色や個性を持っています。

「夢」も同じです。一人一人が、違う夢を持っています。もし、周りに自分とは違う夢を持つ人がいるときは、まず相手の話を最後までよく聞いてみましょう。否定から入るのではなく、一度受け入れてみるのが大切です。その夢が叶うかどうかは、その人次第です。最初から全てを諦めるより、大きな夢を持つことが重要です。夢を追い続ける人々は、いつの時代でも輝き続けています。夢を追うのに、年齢は関係ありません。どんな人にも、平等に夢を追う権利があります。

私は今、声優になる、という夢を追っています。アイドルになる夢を諦めたことで、目標を見失っていた私が出会ったのは、演劇部と、「推し」という存在でした。特に私にとって「推し」は、私の世界を変えてくれた、私の人生に欠かせない存在です。小学校六年生の冬、私は「Snow Man」の佐久間大介さんという存在に出会いました。





彼は、自分の好きなものを、胸を張って好きだと言える人でした。まだアイドルがアニメ好きだということが、広く受け入れられていない世の中でも、彼は堂々としていました。そんな彼の姿を見て、好きなことを恥じる必要はないのだと気付かされました。演劇部で演じる楽しさを知り、アニメ好きな彼の影響を受けて、声優という夢を見つけました。声優という職業は、決して簡単な夢ではないけれど、「誰かの背中を押せる存在」になるため、次こそは諦めずに進んでいきます。

夢を全力で追いつける上で、挫けそうになる時がきっとあると思います。そんな時に、前向きになれるエールソングを一曲紹介します。私の人生を変えた彼が活動する「Snow Man」の楽曲には、多くのエールソングがあります。特に、「What's your color?」という曲は、それぞれの色や個性がテーマになっています。

この曲のタイトルを直訳すると、「君の色は何?」という意味になります。歌詞には、「誰かと同じ色になる必要はない、自分だけのオリジナルな色を大切に輝こう」というメッセージが込められています。他にも、「距離を置きたいとき、息が続かないとき、休憩してもいいよ、ゆっくり休もう」と寄り添ってくれるような温かい歌詞もあります。

夢を追いつけることに疲れたときは、この曲を聴いて、また前を向こうと思います。

最後に一つだけ、皆さんに伝えたいことがあります。あなたの人生は、あなただけのものです。あなたの人生を、楽しんでください。





あとがき

この冊子は、各校から送られてきた少年の主張作文原稿をもとに作成しました。大会の開催に向けてご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

発行 令和8年6月

発行者 高浜市青木町四丁目1番地2

高浜市・高浜市教育委員会



人と想いが  
つながつながるしあわせなまち  
大家族たかはま

